

基調講演①

高大接続改革を捉え直す

～コンピテンシーの視点から～

講師 ▶ 白井 俊（独立行政法人大学入試センター試験・研究統括補佐官）



おはようございます。ご紹介いただきました、大学入試センターの白井と申します。今日は、どうぞよろしくお願いいたします。

今、共通テストについて、いろいろな議論が出て非常に難しい状況になってきています。当然、そのご関心もあるかと思えます。正直、今、政治的なレベルに入っているのです、これからどうなるのかは私自身もよく分からないところもあります。記述式の採点の問題やいろいろなことが指摘されています。もちろん、50万人の答案を20日間で民間の事業者のお力を使って採点していくことは、非常に難しいことは誰でも分かっているわけです。われわれは、与えられた条件の中で、できる限りベストを尽くそうとこれまで考えてきています。世間ではアルバイトの学生が二人で採点して終わりといった話もありますが、決してそのようなことではなく、これまで考えてきたのは、統計的な方法を使って、採点の精度が低めの方が採点した答案については排除をしていく、あるいは回答の累

計別・パターン別にクラスタリングをして、それに対して横串のチェックを行うなど、いろいろなことを考えてきたところでもあります。そうは言っても、採点など全部をきちんとミスなくできるのかというのは、もちろん難しい問題です。それについては、最後は政治的な判断があると考えています。

（スライド1）さて、共通テストの話もありますが、今日は、改めて、高大接続改革を捉え直すという観点から話をさせていただきます。共通テストがどうなるのかはもちろん大事な話ですが、それ以上に高校の指導要領や大学入試、大学に入った後の大学教育改革をうまく連動していこうというのが、本来の趣旨だったと思います。それは共通テストがどのような形になろうと変わらない部分だと思います。今日は、その点を、もう1回、再確認したいと思います。それから、今の共通テストの騒ぎの中で大変重要なことを見過ごされていることを私は個人的に危惧しています。それは、PISAショックです。私も今忙しくて、中身を十分に精査できていませんが、PISA2018の結果は非常に悪いです。2003年、2006年のレベルだったらPISAショックといって大騒ぎになるはずなのですが、なぜかそのあたりが見過ごされ、あまり取り上げられないまま来ています。けれども、これは非常に重大な話ですので、後ほど取り上げたいと思います。

（スライド2）さて、今日はそもそも論から

始めたいと思います。今回の指導要領の「資質・能力」についてです。英語にすれば「コンピテンシー」です。OECD や TIMSS でも使われている分析の考え方ですが、カリキュラムという言葉を一歩引いて考えていただきたいと思いません。カリキュラムは、普通に言うと学習指導要領、あるいは学校の教育課程というイメージがありますが、ここでは一番左側、「Intended Curriculum (意図されたカリキュラム)」というものに相当します。カリキュラムを作る人がいて、そのカリキュラムの内容自体が、質的にも量的にもきちんとしたものになっている、教科の専門的な知見をきちんと取り入れている、新しいニーズに対応している、子どもたちにとっての知的好奇心を喚起できる面白いものになっているなど、きちんとしたカリキュラムを作ることがスタート地点になります。

当然、それだけでは終わらないので、次に実施の段階があります。カリキュラムを実施する「Implemented Curriculum (実施されたカリキュラム)」と呼んでいます。学校や先生方のことが主に焦点になってきます。例えば、先生方の資質・能力、採用、育成、研修はどうかです。高校については、今、それなりの競争率があると思いますが、特に先生方にご案内のとおり、小学校の教員採用試験では、一部の県では 1.2~1.3 倍とほぼ全入に近いような状態になってきていて、非常に厳しい状況であります。さらに、先生方を取り巻く環境として、働き方改革の話もありますし、PISA の話にも連動するかもしれませんが、教科書・教材や ICT 環境も当然、関係してきます。また、保護者が、入試が大事だ、いい大学に入ることが大事だという認識・価値観があれば、当然、先生方に制約条件として働いてくると思えます。そのような諸々のことがあって、「Implemented Curriculum」を考えなければいけません。

先生方も、カリキュラムも、非常に良いものができ、非常に良い条件で、良い先生が指導を

しているということがあっても、最後に問題になるのが、「Attained Curriculum (達成されたカリキュラム)」です。要するに、子どもたちは具体的にどんな力を付けたのかを評価していくことです。これは、当然、授業を通しての形成的な評価もあれば、標準化テスト、全国学力・学習状況調査や今回の PISA のようなテストによる外部からの評価もありますし、「入試」も評価における重要な側面ということもあります。この全体像を捉えた上で、コンピテンシーをどうやって育成していくのかを考える必要があることが、最初のスターティングポイントとして置いていただきたいと思いません。

(スライド3) 次のスライドでは、小・中学校、高等学校から大学に至るまでの考え方として、いろいろな答申等を出しています。一番左下は、学習指導要領において「資質・能力の3つの柱」で、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性など」があります。右上には、大学における「学士力」があります。これは、少し古くて、それほど有名ではないかもしれませんが、平成 20 年に出された学士力答申です。そこでは大学 4 年間を通してどんな力を付けるべきなのかという議論をしていました。そこに書かれているのが、「知識・理解」「汎用的スキル」「態度・志向性」です。真ん中のところは、高大接続システム改革会議で言われている、いわゆる「学力の3要素」で、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」です。表現は必ずしも同じではありませんが、基本的には同じことを書いています。「知識・技能」「思考力」「態度や人との関わり方」です。小学校から大学まで一貫して育てていく、その途中段階である大学入試においても、その力をしっかりと測っていこうと、大きな理念としてこれまで来ています。

(スライド4) 次のスライドは、先ほどの山本先生のスライドにもありましたが、学習指導

要領に規定された「資質・能力の3つの柱」です。これについては、既にご案内かと思えます。

(スライド5) その次のスライドです。最新のPISA2018の結果はアップデートできていませんが、見ていただくと、2003年、2006年はPISAショックと言われました。ですが、数学的リテラシー、科学的リテラシーはそんなに悪くはありません。2003年の数学的リテラシーは30カ国中4位なので、決して悪くはありません。ただ、悪かったのが読解力です。その後、2012年頃には非常に良くなっていますが、2015年にまた1回ランクが下がっています。この間に波線が引いてあります。この年からPaper Based TestingからCBT(Computer Based Testing)に変わりました。そのときの分析も今回と同じように、情報処理やコンピューターの使い方、画面を相手にするTestingに対して、子どもたちが慣れていないのではないかといった分析もありましたが、今回もさらに読解力が下がっています。情報に慣れていない、コンピューターの使い方や画面上の情報処理に慣れていない部分もあるのかもしれませんが、一方では、新井紀子先生がおっしゃっているように、読解力そのものに大きな課題があるのではないかというご指摘もあります。ここは非常に厳しい状態になっているのではと個人的に感じているところであります。

さて、このPISA調査ですが、日本でもPISAショックと言われ、当時のゆとり教育と言われた1999年改定の指導要領が、結果的に見直しをされることになり、各国でいろいろな動きが起きています。PISAの結果を受けて、ドイツなどでもPISAショックと呼ばれる現象が起きています。そのような結果を基にして、各国がカリキュラムを変える動きにまで至っています。そのようにPISAが影響力を増してくると、今度はPISAを行っている国際機関のOECDとしても理論的根拠を求められます。PISAとは、一体どのような根拠に基づいて作っているのか、

ということです。それが、次のスライドにある「key competencies」になります。

(スライド6) 今日はこの「キー・コンピテンシー」について詳しくご説明する時間はありませんが、主に3つのドメインがあります。上から「多様な集団で活動する力」「主体的に行動する力」「道具を使いこなす力」という3つです。これも、先ほどの「資質・能力の3つの柱」に近いところがありますが、3つの力、3つのドメインがあります。PISAで測ろうとしているのは基本的には右下の「道具を使いこなす」です。道具といっても、テキストやシンボル、数字で、実質的には認知的なスキルをきちんと測定していくことを理論的なベースにしています。OECDはこれをさらに広げようとしていて、主体的に行動する力や多様な集団で活動する力についてもPISAで測定しようとしています。あまり注目されていませんが、PISAには、「革新的ドメイン」というものがあり、科学、数学、読解力がメインのドメインですが、同時に、2015年では協同問題解決能力の調査を行っています。これは、日本が1位だったのですが、あまり注目されないうちに終わってしまいました。まさに多様な集団で活動する力を見ようといういろいろトライしていました。ただ、それは、なかなか難しいのが実情です。2018年の革新的ドメインでは、グローバル・コンピテンシーについて測定しましょう、という話がありました。設計段階で、各国から「それは、まだ生煮えではないか」との指摘が出ていました。PISAは参加費も結構高いので、それだけの投資をするに値しないのではないかという意見もかなり出されるなどしたため、日本も含めた主要国の多くはこの革新的ドメインには参加しませんでした。このあたりは、評価が非常に難しいところです。

(スライド7) さて、次のスライドです。先ほどの「キー・コンピテンシー」は、PISAの理論的な背景となったものです。この最終レポー

トが出たのが 2003 年です。この前後の時代、2000 年前後に、いろいろな国、いろいろな国際機関、いろいろな研究者、団体から「21 世紀型スキル」や「21 世紀型コンピテンシー」といったいろいろな提言が出ています。これを総称して「21 世紀型スキル」と呼んでいます。言わんとしていることはほぼ共通していて、「コンテンツからコンピテンシーへ」という形です。2000 年前後に何が起こってきたか振り返ると、今では当然のようにになっているインターネットやEメールを使うことが、一般的に普及するようになってきました。Amazon で買い物をすることが普通に行われるようになってきた時代です。そのような中で、時代がどんどん変わっていくにも関わらず、教育が変わっている姿があまり見えないことに、いろいろな国のいろいろな方が危機感を感じました。そして、新しい提言をしてきたのが「21 世紀型スキル」というものです。その中で共通するのは、「コンテンツからコンピテンシー」という動きだと思います。これを受けて、ニュージーランドやオーストラリア、シンガポール、韓国などのいろいろな国が、どちらかというコンピテンシーを重視した形のカリキュラムに変えてきました。日本の学習指導要領の改訂も、この流れに沿ったものになっていると思っています。

その上で、2000 年前後の「21 世紀型スキル」を志向する運動がありましたが、今ではそれから 15 年ぐらいたちました。基本的なところは特に変わっていないと思っていますが、新しい動きとして、特に近年、移民が急増しています。これは、日本でも皆さんが感じられていると思います。日本でもそうですし、ほかの国でも非常にたくさんの移民の方がいらっしゃいます。

また、その当時、あまり聞かれなかった言葉として、AI があります。2000 年を振り返ると、AI という言葉は研究者以外にはほとんど注目されていませんでした。それが急激に注目されるようになった大きな時代の変化の中で、新し

いコンピテンシーの像を、もう一回、考えようではないかというプロジェクトが OECD でスタートしました。これを「Education 2030」と呼んでいます。これは、私が OECD で勤務していたときに携わっていたプロジェクトですが、このレポートが概ね完成しています。



(スライド 8) この最終型は、宣伝用にデザインをかわいくしていて、少し分かりにくいので、次のスライドに行っていただきたいと思います。

(スライド 9) 表現が違いますが、内容的には同じものです。ここで OECD のコンピテンシーの議論をしてきたわけです。この図を簡単にご説明すると、右上のところに地球があり、書かれているのは「Well-Being 2030」です。みんなが幸せになれる良い状態を目指していかうではないかというものです。「individual & Societal」として、一人だけでない、個人だけではなく、社会全体としての「Well-Being」を目指していかうということです。そのためにどんな力が必要になるのかが、このコンパスの羽状の中に書いてあります。新しい価値を創造する力、責任のある行動を取る力、対立や緊張関係・ジレンマを調停できる力、が 2030 年には必要ではないかということを議論を通じて決めています。この 3 つだけではなく、各国のいろいろな研究者の中で議論して、合意できるポイントとしてできたものです。

大事なものは、ここからです。新しい価値を創

造する力が大事だということは、特に異論はないでしょう。ただ、疑問なのは、新しい価値を創造するといっても抽象的すぎるので、それは一体何なのか、どうやって付けなければならないのか、次の疑問になります。これがコンピテンシーの考えで、まず「知識」があります。知識といっても、いろいろな知識があります。それから、「スキル」です。スキルにも、いろいろなものがあります。認知的なスキルも当然で、社会的・情意的なスキル、自分の感情をコントロールする、他者との関係をうまくやっていく、協働性があるなどいろいろなスキルです。もちろん、身体的なスキルや実用的なスキルもあります。3つ目ですが、「態度・価値観」です。例えば、相手に対するリスペクトです。何か対立があったときでも相手に対するリスペクトがあるかないかで、解決できるかどうかが変わってくるでしょう。また、どのような価値観を持っているのかということも大事です。人権を尊重する、他者の権利を尊重する、というような価値観をきちんと持っているのかということも大事になってきます。逆向きで説明をすれば、新しい価値を創造するためには、自分の持っている知識やスキル、態度・価値観を組み合わせ、その場面、場面で新しい価値を創造していくことが求められてくると思います。自分の引き出しがたくさんあり、引き出しの中から、場面に応じて必要な知識、ここで対人関係が課題になっているので、一緒に協働する力を引き出して使っていくことがコンピテンシーの本質的な意味になると思います。

(スライド10) この3つのドメイン「知識」「スキル」「態度・価値観」を置いている「Education 2030」の作成過程で、日本では学習指導要領を作っていました。お互いに連動関係にあって、日本が一方的にまねしたということでは全くありませんし、日本からもインプットして、お互いに作ってきた形になっています。結果的に、「Knowledge」「Skills」「Attitudes

and Values」のドメインの形でかなり似ています。もちろん、必ずしも同じではなく、違うところもたくさんありますが、結果的に、この3つのドメインを大切にしようとしています。

ここで、もう1回、ご注意いただきたいのが、これらのドメインは単体で考えるものではないということです。各「資質・能力」が単体ではなく、相互に関連付いて作用し、そこで初めてコンピテンシーとなります。トライアングルの線で囲われていますが、それぞれが単体というより全体を統合的に育成していく部分、また評価においても、どれかだけを評価するのではなく全体を連動させて評価していく部分が大事になってくるかと思います。

(スライド11) さて、次の分野に入りたいと思います。「アクティブ・ラーニング」です。ここは「Implemented Curriculum」の領域となり、先生方の普段の授業の中でのアクティブ・ラーニングになります。ちなみに、余談ですが、先月、OECD が主催する国際会議に呼んでいただいた際に、中国の学校に行く機会がありました。そこは中国の北京市でトップ5、5本の指に入るミドルスクールで、全校生徒4,000人、先生数が360人でした。先生は全員Master以上で、360人のうち80人はPh.D.を持っていました。授業も幾つか見せてもらいました。中国語なので全部は分からなかったものの、大体のことは漢字と雰囲気で見分かったのですが、典型的なアクティブ・ラーニングでした。今、日本の熱心な先生が取り組んでいるアクティブ・ラーニングと、ほぼ同レベルではないかという印象を受けました。

さて、この「アクティブ・ラーニング」についてです。アクティブ・ラーニングの議論は出てから何年もたっていますので、先生方の理解も進んでいると思います。当然、「一方向型授業」をすることを否定するものでもなく、逆に、グループワークやペアワークを入れた「対話型授業」をすればいいというものではありません。

アクティブ・ラーニングは、教科の本質を考えたり、教科の深い理解につなげるための児童・生徒の状況を踏まえた柔軟な授業をデザインすることであると思います。もちろん、子どもたちの状況が前提になりますので、先生が話す場が多く、少しつまらなそうにしていたり、参加意識を持たせようとしていたりすれば、それに応じてグループワークやペアワークを入れたり、プレゼンテーションの機会を設けたり、いろいろなやり方があると思います。柔軟な授業デザインがその本質であり、型を優先すると変なことになってしまうと考えています。

(スライド 12) 先生方が、専門家としての専門性を発揮していくことが大事だと思っています。当然と言えば当然なのですが、その専門性には2つあります。「児童生徒理解についての専門性」、学力層が高い学校もあれば、チャレンジな学校もありますが、それぞれの子どもたちの状況や関心・意欲に応じて、どのような授業展開をしていくのかという専門性です。それから「教科等についての専門性」になります。また後ほどお話ししますが、特に、「見方・考え方」を活かしていくことがあると思います。

(スライド 13) この図は、いろいろ描いてありますが、資質・能力を身に付けるための学習の場面、それから、そのような場面でどのように認知が深まっていくのかを簡単にまとめています。まず、中段のところ「学習の場面」ですが、当然、一人一人で考えることが必要になってきます。先生が説明したことを理解する、あるいは自分で疑問を持って考えたりすることです。ただ、それだけでは足りなくて、「協働的な学び」が必要になってくるでしょう。先生に質問する、クラスメートからの質問に答える、自分の考えを他者に説明する、他者の多様な考えを聞くようなプロセスを積むことによって何が起こるかという、「メタ認知」が起こります。自分の考えを吟味して、必要な修正を行います。「自分でここは気付かなかったけ

れど、確かにクラスメートの言うとおりでな」「先生はこういう考え方をするんだ。なるほど」と考えを修正していく、補正していくことがあります。それによって何が起こるかという、認知が深まっていき、公式・定理・事象などの概念についても理解する、理解した概念をいろいろな課題に提供していく、概念相互の関係を理解する、概念の背景などをより深く理解する、概念と実社会・実生活上の問題の関係性について理解をすることが起きてきます。これを目指していこうということが、アクティブ・ラーニングの基本的な考え方と思っています。

(スライド 14) これは、数学の学習指導要領改定のときに既にお出ししている資料ですので、特に数学の先生にはご案内だと思います。「焦点化した問題」が真ん中に書いてあります。従来の数学では重視されていた部分で、もちろん、数学的な思考という部分では本質的になる部分です。ただ、一方では、あまり焦点化しすぎると、子どもたちにとっては、なぜ数学を学ぶのか分からなくなることもあると思います。例えば、角を少し落とした立体があり、その立体の体積を求めなさいという問題がよくありますが、それは一体何のためにやるのだろうかという話になってくることもあるかと思えます。もちろん、焦点化した問題を否定するものではありません。数学的にきちんと考えることは当然大事なのですが、日常生活や社会の事象と関連付けて、どのように適応できるかを考える、あるいは数学的よりも発展的・統合的に深く考えていく、一歩引いて全体の像を考えていくことが大事であろうと思います。

(スライド 15) 次が、地歴科、歴史総合で書いてある「見方・考え方」です。「社会的事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付け」て働かせる際の「視点や方法」であります。「時期・年代などの時系列に関わる視点、展開、変化、継続など諸事象の推移に関わ

る視点、類似、差異などの比較に関わる視点、背景、原因、結果、影響、関係性、相互作用など事象相互のつながりに関わる視点、現在とのつながりなどに着目して、比較したり、関連させたりして社会事象を捉えることとして整理したもの」とあります。この「見方・考え方」自体が、元々教科によって以前からあったもの、なかったものがあります。あるいは「見方・考え方」自体は以前からあったけれども、今回の指導要領で整理が変わっているところもあります。基本的にはコンテンツとコンピテンシーを結び付けていくものだと思っています。要するに、いろいろな社会的事象、歴史的事象を学んでいくのですが、「それはなぜなのか」という考えを比較する視点がないと、ただの暗記になります。そこを脱却して、プロの視点を獲得するということです。実際、この「見方・考え方」は、大学・高校の歴史のプロの先生方に作っていただいたものですが、「プロだったら、こういうふうにして見るんだよ。こういうふうにして考えるんだよ」とまとめていただいたものです。

先ほど（スライド9）の「Education 2030」の説明の中で、「知識」「スキル」「Attitudes and Values」の3つのドメインがありました。その「知識」の中で、「Epistemic Knowledge」があります。「知識」の中には、「Disciplinary」教科面的な知識、「Interdisciplinary」教科横断的な知識、「Epistemic」な知識と、手続き的知識で構成されています。この「Epistemic」な知識とは一体どのようなものかという、プロがどう考えるのかという知識です。プロの考えの基盤となるような知識だと言えます。OECDの説明では、“Think Like a Historian” 歴史家のように考えるための知識、“Think Like a Mathematician” 数学者のように考えるための知識として整理をしています。知識の中で、日本の学習指導要領の「見方・考え方」は資質・能力の中には入れませんと整理をしています。

整理の仕方が少し違いますが、本質的には同じものです。この「見方・考え方」は、歴史であれば、単にいろいろな諸事象を暗記することではなく、プロだったらこのように考える、このように物事を捉えるという部分に着目する、それが、ここでご紹介した歴史総合における教科の専門性です。まさに、プロの視点が凝縮されたものが、この「見方・考え方」と考えています。

（スライド 16）さて、次のスライドからは「評価」についてです。今日は高校の先生が多くいらっしゃいますが、高校の評価は、小・中学校と比べると穏やかな感じで行われているのが実態ではないかと思います。少なくとも「観点」別という意味ではあまり行われていなかったのではないかと思います。指導要領の考え方からすると、育成すべき資質・能力としての「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」のそれぞれに応じた観点があり、それごとに評価をしていく、これが基本的な考え方です。ただ、「学びに向かう力・人間性等」については、感性や思いやりのように、先生がABC評価するのはなじまない部分があるので、そこは個人内評価をしましょう、それ以外についてはABCという形で、指導要領に書いてあることを満足しているかどうかを起点にして評価していきましょうとなっています。総合して評定を付けますが、中教審における議論の際には「評定をやめよう。ABCがあれば、それで足りるので、評定は要らないのではないか。逆に、評定があると、評価のポイントが不明瞭になってしまうのではないか」という意見もありました。ただ、実態として、やはり保護者のニーズや分かりやすさがあり、あるいは奨学金や大学入試でも評定が使われている実態もあり、あまりにも急激な変化になってしまうので、今回は「評定」については継続している形になっています。

（スライド 17）この「評価」のフレームワー

クを作るときに、中教審で高校生や大学生を呼んでヒアリングをする機会がありました。これは非常に面白くて、生の声を言ってもらいました。どんな声が出ているかという、最初の方は新社会人です。長野県の商業系の高校を卒業して、市役所に勤めている方です。「先生方は大変だと思うのですが、学校の授業の中でも、テストの際でもいいので、どういう点がよかった、どういう点をもう少し頑張ってもらいたい、という一言でも頂けたら、もっと向上できたのに」という意見でした。それから、二人目の方は、埼玉県の私立の高校3年生の方です。「通知表で数字だけ示されても分からないので、中身をもっと提示してほしいです。数字での評価では、そう評価された理由を推測することしかできないということがあります」。三人目の方は、和歌山県の県立高校出身の方です。「私の通っていた高校では授業中に寝たらマイナス1点、発言したらプラス1点といったように、学力と関係のないことをポイント化して評価を付けている現状が実際にありました。これだと、能力がある子ではなくて、真面目に授業を聞く子、それから積極的に発言する子が評価されてしまうので、それらを意欲として評価して、それによって評定を上下させるのは、評価の正当性に欠けていると思います。関心・意欲・態度という観点でポイントを付けたとしても、それは科目に対する意欲ではなくて、授業に真面目に取り組むという意欲なので、本来評価すべき点とすり替わってしまっていると、私は思っていました」。なかなか鋭いご意見だと思います。和歌山のような事例も実際にあった話だと思いますが、このようなことも起きています。

(スライド 18) 難しいのは、態度の評価です。大学入試では主体性等と言われていますが、今からお話するのは学習指導要領の考え方です。現在では「関心・意欲・態度」と言われていますが、「主体的に学習に取り組む態度」をどうやって評価していくのか、何を評価する

のかということです。小・中学校でよくある評価として、「CCA」「AAC」問題があります。厳密には、今は4観点なのですが、ここでは、それを3観点に置き換えて表現しています。

「CCA」「AAC」がどのようなものなのかという、知識C、思考力C、態度Aという状況です。あるいは逆に、知識A、思考力A、態度Cという状況なのですが、一体どのような状況かという、「CCA」のケースは、とにかく勉強はすごく苦手ですが、すごく真面目に先生の話をよく聞いていて、提出物もきちんと出しているような場合です。先生の気持ちとしてよく分かるのですが、この子に少しでもいい評価を付けてあげたいので、態度Aとなる。逆に、「AAC」でよくあるのが、塾などへ行って激しく勉強していて、学校の授業はほとんど分かっているのに、学校の授業を軽視し、提出物もろくに出不さないような子です。テストの点が取れるから、知識Aですが態度Cというのはあり得るケースだと思います。このような問題をどうしようかと考えました。結局、態度について何を評価するかということです。提出物だけで評価すると、そうなります。手を挙げるか授業中に寝ているかで態度をプラス1点と評価すると、そうなります。しかし、問題は、それに意味があるのかということです。

(スライド 19) ここでは、「主体的に学習に取り組む評価」について、もう1回、考えてみました。「①粘り強く取り組む」側面と、「②学習の調整」という側面の両方を評価していこうと議論を整理しています。これは別に新しい話ではなく、今の評価の仕組みでもそのようになっているはずですが、残念ながら実態と乖離が生じているので新しい言葉を使っています。すなわち、「学習の調整」です。右側の図を見ていただきたいのですが、X軸にあるのが、「粘り強く学習に取り組む態度」です。Y軸にあるのが、「自ら学習を調整しようとする態度」です。どちらかという、これまでの評価は①の

X軸を中心に評価していました。何かをととても頑張っているので評価してあげる。ただ、それでAにして本当にいいのか、それは本当に正しい評価なのかということです。主体的に学習に取り組む態度ですが、それを評価する際に、ただ頑張っているだけでも、A評価を与えたら「あなたの学習態度は非常にいいですね。引き続き、このままやっていたら必ず知識も思考力も上がります」と、先生が保証していることとなります。ここで必要になるのが、学習の調整という考え方です。自分がしている学習についてメタ認知をし、もしこれがうまくいかないのであれば、次の方法をトライしてみようという、ある意味当然なことです。学習をやってみてうまくいかなかったら、それをいかに改善しようとするのか、それは社会人になっても当然重要な話だと思います。

先日、ラグビーのワールドカップで盛り上がっている日本代表のテレビを見ていたら、スクラムの組み方でも足の置き方や肩の組み方を非常に工夫して、どうしたら力を一番発揮できるのかを特集していましたが、まさに調整です。スクラムも調整ですが、それを学習の中でも行うことが、その人のために必要な話ですので、ここでは2つの軸で組んでいます。この図は、意図的に曲線を上に上げています。粘り強く学習に取り組むのは大事ということを否定しないが、それだけでは簡単にA評価にならない、学習の調整の態度があって初めてAになることを強調するために、あえて下に空間を取っています。

(スライド20) 中教審の初等中等教育分科会の教育課程部会で、評価のあり方についてレポートが出されています。ここに入試に関することも書いてあります。一番上には何が書いてあるのかというと、評価の観点です。どのような評価をしていくのかについては、あらかじめ児童・生徒とも共有していくことが大事と書いています。先生方も、特に中学校だと内申書に非

常に重みがあるので、保護者から「どうして、うちの子は数学が4ですか」などと問われたりする。そのため、記録を集めることに終始してしまうケースがあります。それは非常にもったいないことであり、むしろ必要な指導を行ってくださいということが2つ目です。3つ目は、調査書とも関係しますが、調査書の内容が膨らみすぎることは良くないでしょう。「例えば、地域スポーツクラブの活動、各種の習い事、趣味に関する活動、学校帰りに行う多様な活動については、必ずしも教師が把握することが求められるものではなくて、在籍する学校における評価の対象でもない」「入学者選抜を行う高校や大学等は、これらに過度に依存することなく、生徒一人一人の多面的・多角的な姿を考慮するように、本人が提出する申告等を通じて確認するのが求められる」と書いています。これを言うのと、「調査書の枚数制限がなくなったことと矛盾しているのではないか」とよく言われるのですが、タイミングが違うのです。調査書の話はかなり早く決まっていて、このレポートが書かれたのが去年の2月です。働き方改革の話も出てきて、このような提言をしているのですが、大学入試制度は何年も前に決めておかななくてはいけないので、なかなか難しいところがありますが、次の機会にはこのように改めたいと思っています。



(スライド21) さて、その次に進みたいと思います。「大学入学者選抜改革」であります。大

学入学共通テストのポイントとして、3点あります。一番大事でボリュームが大きいのが、マーク式の充実です。それをもって高等学校の授業改善にもつなげてもらうことであります。これは、われわれとしては非常に大きなミッションです。点数的にも何百点と全体的にもかかってくるところで、関わっている人も圧倒的に多いです。今、見失われつつあるので、ここをもう1回フォーカスしたいと思っています。2点目が記述式で、3点目の英語については、既に延期が決まりました。また、各大学の個別試験でも、学力の3要素をきちんと評価していこうというように、先ほど、山本先生からご紹介されたとおりであります。

(スライド22) 現在の仕組みを、資質・能力の観点から見てみたいと思います。一番左側にあるのが、学習指導要領の目指そうとしている「資質・能力の3つの柱」です。それを普通の授業では、高校における「学習評価」として、「評定」である数学は5で、「総合所見」については文章で、評価をしていきます。大学入試という場面では、センター試験、共通テストにおいてはマーク式問題で「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を問うています。ただ、どちらかという、高次の思考力・判断力・表現力は、本格的な記述式問題や口頭試問などではないとなかなか問えない部分もあります。個別試験は非常に柔軟にできますので、調査書を活用したり、大学ごとに工夫した問題を出したり、あるいは、記述式も含めていろいろな問題を出すことができたり、面接やエッセイ、personal statement のようなものを書かせたりすることもできます。このような中で、いろいろなツールを使って3つの資質・能力をきちんと評価していくことが、今は十分できていないので改善していこうということになります。

(スライド23) では、新しい仕組みでどのように行っていくのか、何を目指していくのかです。1つは、従来のセンター試験はマーク式問

題なので、高次の思考力・判断力・表現力等の測定については限界があります。そこをなんとか工夫して評価できるようにしていき、思考力・判断力・表現力の幅を広げていきます。今のセンター試験が思考力・判断力・表現力が問えていないわけではありませんが、より範囲を広げていくことが1つです。また、調査書については、いろいろな課題がありますので、先生が全部を評価することではなく、e-Portfolioを使って、受験生の多様な側面を大学入試で見えていくことが大きな考え方かと思います。

(スライド24) 次に、「共通テスト」について触れたいと思います。共通テストの「問題作成方針」では、「従来の蓄積を生かしながら、どんな資質・能力を問うのかをきちんと意識した問題を作っていきます」「高等教育の成果、大学教育の基礎になるような知識・技能、思考力・判断力・表現力を問うていきます」ということが書いてあります。「『どのように学ぶか』という場面を踏まえた問題設定」については、高校でもアクティブ・ラーニングが行われている前提に立った上で問題を作っていくのではないかということを言っています。これは問題作成方針の中にも書いてありますが、歴史でも、初見の資料も遠慮なく出していこうと書いています。要するに、従来あったか分かりませんが、例えば「この教科書や資料集がよく出るから、チェックしておくように」のような指導ではなく、専門家しか目につかない初見の資料であっても、しっかりした考え方が身に付いていれば受験生が解けるような問題を作っていきたいと、この問題作成方針の中に書かれています。

(スライド25) 次の問題はプレテストですので、数学の先生は既にご案内だと思います。プレテストの問題で「階段問題」と言われています。「三角比を用いて、この階段の傾斜について書きなさい」という問題です。問題自体は数学Iなのでそんなに難しい問題ではないと思

いますが、設定が結構面白くて、「高校生が、久しぶりに小学校に行くと、階段の段差が緩やかなことに気付いた。建築基準法ではこのようになっている」、その上で三角比の問題を解かせることになっています。ここでもかなり議論があり、数学の先生からすると、こんな余計な設定は要らないというお考えもあります。一方では、高校生からすると「一体、何のために僕たちは三角比を学習しているのだろう」。ある方は、「自分は社会人になってから、三角関数なんか一度もやったことない。そんなのを数学でやっても無駄だ」とおっしゃっていました。けれども、三角比や三角関数は、測量関係や建築業界の方にとっては必須の概念だと思います。やはりそれらがどのように社会の場面で使われているのかを子どもたちに意識してもらい、実生活や実社会でどのように使われているのかの連動性、オーセンティック・ラーニングと言いますが、そのような部分を高校の場面でも、ぜひ意識してもらいたいと思います。共通テストで、数学の焦点化された問題ばかりですと、もちろん高校の授業でセンター対策だけを行っているのではありませんが、そのような影響はあると思うので、先生方を後押しできるような問題を作りましようと考えています。

(スライド26) 次が、日本史Bです。この日本史Bも、問題が難しいとは思いませんが、「江戸幕府滅亡のターニングポイントになったのはどれですか」という問題が出されています。従来だと、ややもすれば、選択肢が並んでいて、一番適当なものを選びなさいという問題だと思いますが、ここでのちょっとした工夫は、選択肢20の答えがないことです。ないというのは、「あなたが考える江戸幕府滅亡のターニングポイントになったものを自分で好きに選んでください」ということです。なので、ここでは(ア)の桜田門外の変でも、年表中の(イ)の第二次長州征討でもどちらでも構いません。ただ、この場合、(ア)を選んだら21番ではこ

の理由、(イ)を選んだら21番ではこの理由と、いうように合致する理由を選ばなければいけないという工夫をしています。これも、当然と言えば当然なのですが、多くの社会的事象は複合的な原因で起きています。そこをきちんと頭に置いていかないとなかなか答えられないので、そのような授業をぜひ意識していただきたいという形で作っている問題であります。

(スライド27~28) 次は、平成29年度のプレテストの国語の問題です。生徒会活動をテーマにした記述の問題です。「記述式問題」について、今、採点などを巡っていろいろなご批判があるところですが、記述式問題の重要性自体を否定するご意見はほぼないわけです。なぜこの記述式問題が大事なのか、もう1回、触れておきたいと思います。選択肢の中から回答を選ぶだけではなく、自らの力で考えをまとめ、相手が理解できるように根拠に基づいて論述することは、当然、絶対に必要な力であります。大学の先生から「大学生になっても、レポートとか論文が全然書けない学生がたくさんいる」という話も伺います。社会人になっても、当然、必要な力であります。そのためには「メタ認知」が必要であり、自分の認知を対象化して認知をしていくことです。自分が書いた答案が他者に伝わるような表現になっているのか、あるいは、正答の条件に照らして合っているのか、試験問題であれば一定の採点基準に対して合っていると言えるのかどうか、そのようなことを判断していくことが大事になってくると思います。

自己採点といった話も共通テストの中で出てきていますが、自己採点も、力があれば当然できると思います。一方で、高校の授業でも、どのような基準になったら点が付くのか、あるいは部分点が付くのかというところは課題です。例えば、定期考査の後で「A君の答案は50点でした。B君は70点でした。では、この違いはどういうところにあるのか」といった授業はあまりないのではないかと思います。高校の

授業の中でも、一定の条件に合致しているのか、ということは大変な考え方だと思います。これは共通テスト対策などということでは全くなく、普段から行うことは非常に重要だと思います。記述式と言うと「自由に表現するのが大事だ」という意見もあり、それは否定しませんが、全くのオープンエンドで書けることは実社会においてはほとんどありません。「こういうテーマで論文を書かなければいけない」「こういう内容で報告書を書かなければいけない」など一定の条件があるので、それに合致して作っていくことは、当然、重要な思考力の一局面です。「思考力・判断力・表現力等」という言葉は、結構あいまいに使われることがありますが、もう1回考え直していくべきかと思います。

(スライド29) 共通テストを含めて、いろいろな大学入試の問題がありますが、良い試験問題とは何なのかということは、かなり難しい問題だと思っています。私も大学で講義を担当していて試験問題を作っていますが、試験問題を作ることもなかなか難しいし、採点も難しいので、全くその通りだと思います。従来のセンター試験では、2つの大きなテーマがありました。それが上の2つであり、1つは「堅牢性」です。各教科等の専門的視点に照らして間違いがないかという点です。これは、とても厳しいです。センター試験では、試験が終わった後、新聞に出るので、皆さんはそれをチェックされて、各専門家の方や予備校の先生が「これは、おかしいのではないか」という問いを大量にセンターにお送りいただきますので、それに対して丁寧に対応しています。今、プロの研究者がセンターの問題を作っていますが、それでもたくさん情報を出していくと、微妙な判断が出てくるのがかなりあります。そもそも正答選択肢がなかったり、正答と思っていたものが思わぬ理由で正答と言えなかったりするケースもあります。正答選択肢が2つ以上存在したり、もともと誤答と思っていたものが実は正答だったり

ということもあります。また、指導要領の範囲を超えて問題が出てくるなど、かなり厳しく問われてきます。

2つ目が、「識別性」です。これはテスト問題としての機能ですが、定期考査など違うタイプの試験であれば、第1問の(1)はサービス問題で全員100点ということも当然あると思いますが、選抜試験ではそれでは意味がありません。テストの世界では、その人の能力を適正に測定することが重要です。聞きなれない言い方も知れませんが、できる人がきちんとできる、できない人がきちんとできない、いわゆる「識別性」がある問題を作っていくことが大事だと言われています。テストの視点からすると、簡単すぎてほとんどの人が正解する、あるいは難しすぎてほとんどの人が不正解になっては駄目なのです。当然ですが、識別できないと、できる人もできない人もわからないので、そこに差を付けなくてはいけないのがテストに求められる宿命ということになります。センター試験の場合には、受験者数が非常に多く、55万人もいます。55万人にうまく差を付けなければいけません。当然、トップクラスのととてもできる子から、本当に難しい子まで、多様な受験生がいますので、そこでの識別を働かせる問題を作るのは非常に難しいことです。

ちなみに、55万人の受験生のうち10万人の受験生は、大学への情報提供や成績提供をしていない受験者層となります。何を意味しているかということ、「推薦などで決まったので、結果的にセンター試験に行きませんでした」という人もいます。一方で、本当に受験しない子や、就職や推薦が決まったので、高校での学習の集大成としてセンター試験を目指そう、という受験生もたくさんいます。合わせると10万人います。そのような受験生も含めて55万人が識別できる試験を作らなければいけない状況です。

従来のセンター試験では、この2つが大きな

ポイントでしたが、さらに、今、問われているのが「メッセージ性」です。高校の授業改善、生徒の学習改善につながるようにしていくことです。先ほど、ご紹介した日本史における江戸幕府の問題のように、思考のプロセスを問う問題です。ただ、選択肢を選ぶのではなく、自分の考えたものとその理由を合致させて解かなければいけない問題です。また、冒頭に申し上げたように、新規の資料を既習事項を活用して読み解く問題です。誰も見たことがないような資料を与え、既に習っていることをきちんと理解できていれば解ける問題を出します。なんとなく教科書・教材に出ていたと覚えているだけでは、なかなか解けない問題にしていこうと考えています。もちろん、それ以外にもたくさん考えるべきことはあり、分野・領域間のバランス、難易度・正答率、過去問との重複を避けるなど、いろいろな観点があります。その中で、良い試験問題を全体のバランスとのセットで作るという非常に厳しい作業が求められています。

(スライド30) 次のスライドは、少し前に話題になった、平成29年度のセンター試験で実際に出された問題、いわゆるムーミン問題です。これは、地理の先生はよくご存じだと思います。現行のセンター試験でもチャレンジングな問題を出していますが、これを良いと捉えるのか悪いと捉えるのかは非常に難しいところです。

「堅牢性」である Academic Discipline の観点からすると「アニメのムーミンを出すとは何だ。学術的な根拠はどこにあるのか」「ムーミンの出身地がどこかをアカデミックにどう証明するのか」という話になり、難しいところもあります。一方で、受験生の興味・関心を引いていくという意味では面白い問題ですし、議論が分かれるところかと思えます。

(スライド31) 最後に、試験の「公平性」について少し触れて終わりたいと思います。高大接続改革会議のスターティングポイントとし

て、1点刻みの試験から脱却していくことがあったかと思いますが、そもそも、公平な試験とは一体何だろうかということ。従来の公平感だと、「一斉・一律」できちんとしていくことが重視されていたと思っています。実際、センター試験は全国1万の試験室で行っていますが、例えば、ある会場のある試験室では試験官が30秒早く時計を止めてしまい大問題になるというように、非常に高度の「一斉・一律性」が求められています。しかし、公平な試験はそもそも何だろうかということ。す。

この漫画が含意しているのは、「皆さん、今からあの木に登ってください」という「一斉・一律の試験」です。とは言っても、受験者の動物にはいろいろな個性があります。木に登るのが得意であったり、全然登れなかったりします。その中で、その動物たちにとって本当に公平な試験なのかと言われると、それは悩まざるを得ない部分があります。今の試験も、そうですよね。もちろん、センター試験も工夫しています。各大学の個別試験もいろいろ工夫していますが、「偶然、今日は得意分野ばかり出て良かった」と言う人もいれば、「今年は、運が悪かった。自分が不得意なところばかり出てしまった」と言う人もいます。あるいは、個人的な事情もあります。例えば、その日にご家族に何か不幸があった人もいるかもしれない、「とても受験どころじゃなかった。残念ながら今年は不合格でした」という人がいるかもしれない、いろいろな事情があると思います。私がセンター試験を受けたのは、阪神淡路大震災の年でした。私は関東なので直接的な影響はなかったのですが、関西の、特に神戸などの地区から大学に入ってきた人は本当にすごいと尊敬の気持ちを持っていました。阪神淡路大震災はセンター試験の直後で、2次試験に向けてショックもすごく大きかったと思いますが、そのような中でも同じ日程で試験を行っているわけです。いろいろな事情をどう捉えるかは、非常に難しい課

題だと思えます。

(スライド 32) そもそも、大学入試における「公平性」とは何だろうか。問題・日程・時間が同一であることが必要なのか、それとも一人一人の多様な側面を見ていくことが必要なのか。経済的な格差や家庭環境も否定しがたい事実としてあります。さらに、地理的な格差、離島や僻地、山間部の方もいらっしゃいます。そのような中で、どのようなものが公平な入試なのかと、英語の4技能試験でもいろいろ議論がありました。離島の生徒は、英検やTOEFLを受けるために都市部まで船に乗っていかなくては行けないが、そんなことができるのかという話もありました。どこまでが許容できて、どこまでが許容できないのか、経済的な格差や家庭環境はいいのか、一人一人の多様な側面を見るにはどう考えたらいいのか、いろいろなことが公平概念の中に求められてきます。



(スライド 33) いろいろな「公平性」について考え方がありますが、今、CBT (Computer Based Testing) の議論も出ています。その中で、いろいろなやり方がありますが、一般的に行われているのはIRTというやり方です。IRTは、簡単に言うと、事前にいろいろな人に問題を解かせておきます。高いレベルでないとできない問題はこれくらいなど、問題ごとに難易度を特定しておきます。問題ごとに難易度が既に分かっている状態で、ランダムに出題していきます。既に問題レベルが分かっているの、それを解

いていけば、その受験者がどんなレベルか分かってくるというやり方です。これは別に全く珍しいものではなく、公式にIRTを使っているとは言っていないかも知れませんが、TOEFLや英検の新しいCBT、新井紀子先生が行っているリーディングスキルテストでもIRTを使っていると思います。大規模な試験では、大体使われています。TOEFLを受験されている方はご存じだと思いますが、自分の好きな時間に行って、受けてきます。問題は、人によって違います。ただ、TOEFLとしての一定のスコアは出てきません。TOEFLは積み重ねがあるので、問題や時間が違ってもTOEFLのスコアには一定の信頼度があると思います。今後のセンター試験でIRTをどう考えていったらいいのでしょうか。

IRTにもいろいろなやり方があります。左側はアダプティブな方式で、普通は少し易しめの問題を出していき、できる人にはどんどん難しく、できない人にはもう少し易しめの問題を出し、スコアを出していきます。右側は、リスト方式と言い、共通の難易度を持っている別の問題のリストを作っておき、それを毎回出していくやり方もあります。いずれにしても、統計データに基づいた考え方ですが、従来の試験と大きく違うところは、事前に多くの人が問題を解かなくては行けないということです。ですので、問題が漏れる可能性があります。もちろん、漏らさないようにはしていますが、「僕が受けた試験はこんなだったよ」と言うこと自体は完全には止められないでしょう。ただし、問題に何万問という蓄積があり、その人がその日にどの問題を受けたか分かりませんので、統計的には問題がないと考えられています。一方、日本の大学入試センターでは、非常に厳しい機密保持が求められています。「絶対に事前に漏らしては行けない」というのは、何を差しおいても守らなくては行けないので、その感覚からするとかなり大きな違いがあると思います。さらに、IRTの場合には、問題は基本的に非公表になり

ます。全部公表すると事前対策される可能性があるのですが、基本的には非公表にします。もちろん、漏れる可能性は否定できないが、基本的には出しません。PISA2018も、最近公表されましたが、全体像は公表していません。出されているのはサンプル問題だけで、全貌は誰も知りません。受験生は知っていますが、彼らの記憶の中にしかないわけです。そのようなやり方に変わってもいいのかということになります。

(スライド34) 今、大学入学共通テストで、情報科でCBTを導入するという話があります。情報科は新しい試験ですので、今のセンター試験の枠の中には入りきりません。センター試験2日間では既にいっぱいですので、CBTを使おうとすると別の日程にしなければいけません。おそらくCBT方式にしなければいけないと思いますが、そうすると、英語4技能試験と同じように、情報科1科を受けるために離島から都市部に行かなければいけない、経済格差はどうするんだ、といった話が出てくる可能性もあり、なかなか難しいところがあるかと思います。

CBTには、いろいろな運用方式があります。テストセンターに行って受験する方式もあれば、学校等のICT環境が良くなれば学校で受験するなど、いろいろなことが考えられます。

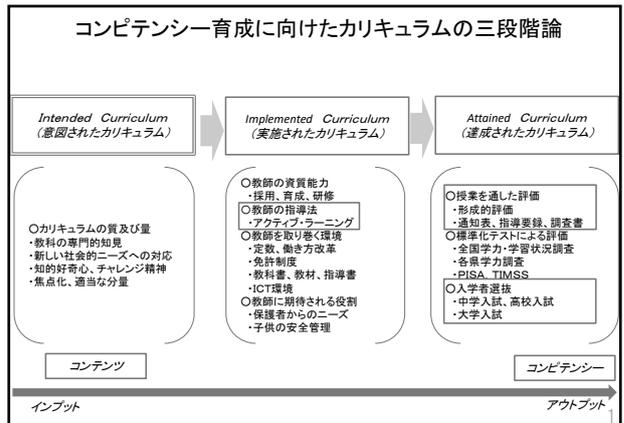
以上で用意したスライドは終わりましたので、私からの話はこれで終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

スライド1

**高大接続改革を捉え直す
～コンピテンシーの視点から～**

白井 俊
(独)大学入試センター 試験・研究統括補佐官(兼)審議役

スライド2



スライド3

大学において育む「学士力」

- 知識・理解
- 汎用的能力[※]（コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力等）
- 創造的スキル、それを支える統合的な学習経験
- 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等）

※学術力基準においては「汎用的技能」とされているが、ここで意味されている汎用スキルとは、個々の身体的動作や機械的装置に関わる偏局的技能とは異なる、総合的な知識と多面的な、中長期的な学習・能力に関する議論の進展も踏まえ、本スライドでは「汎用的能力」としている。

高大接続改革「学力の3要素」

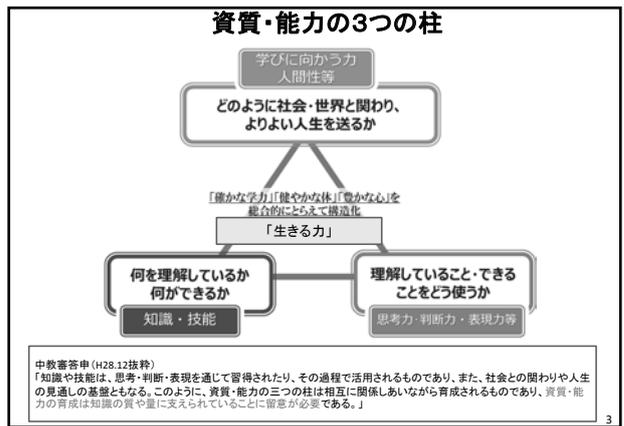
- ① 知識・技能の確実な習得
- ② ①を基にした「思考力・判断力・表現力」
- ③ 主体性を持って多様な人と協働して学ぶ態度

学習指導要領改訂における「資質・能力の3つの柱」

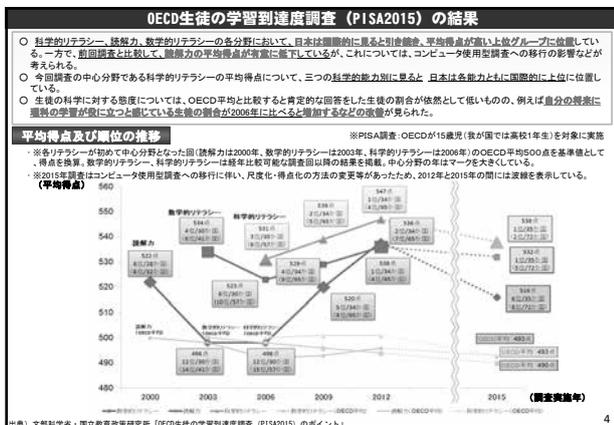
- ① 生きて働く「知識・技能」の習得
- ② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

出典 学士課程教育の構築に向けて（第4）（平成20年12月）
出典 高大接続システム改革会議「最終報告」（平成28年3月）

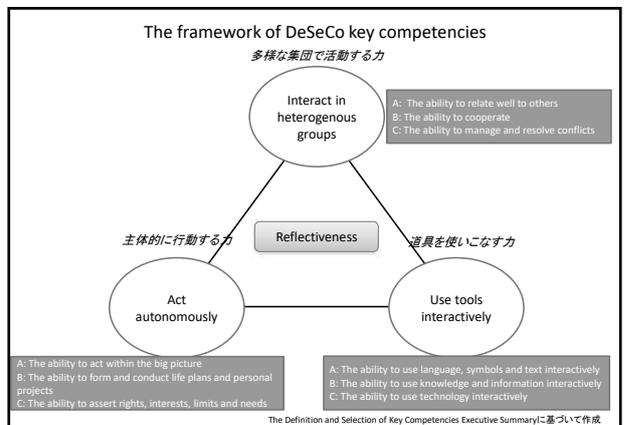
スライド4



スライド5



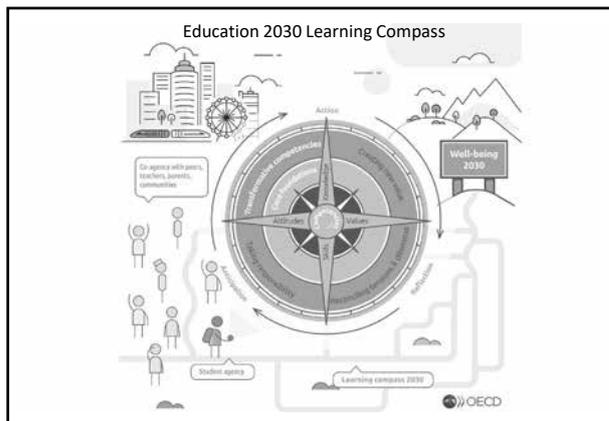
スライド6



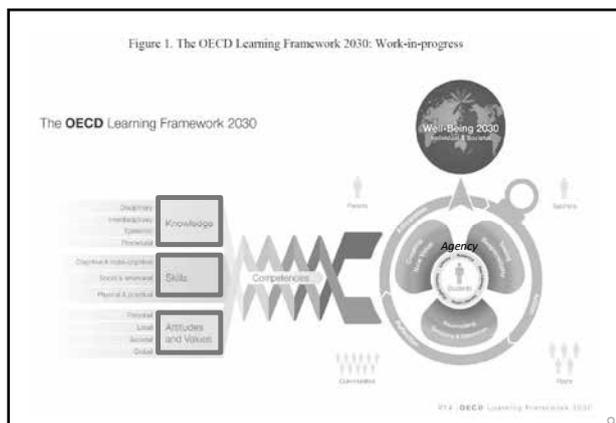
スライド7

- DeSeCo キー・コンピテンシー(1997-2003)
 - PISAの理論的背景
 - 「21世紀型スキル」「21世紀型コンピテンシー」
- 「コンテンツからコンピテンシーへ」
- OECD Education 2030 (2015-present)

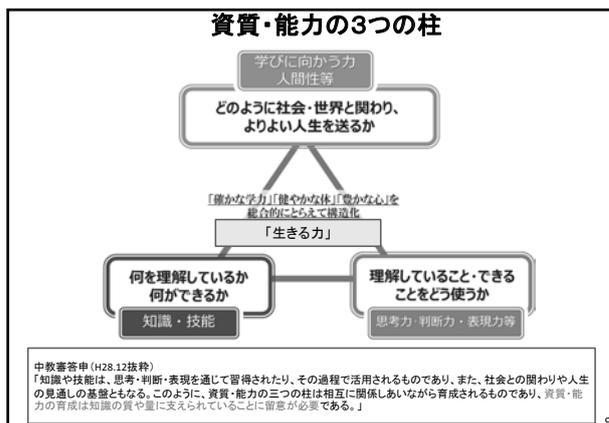
スライド8



スライド9



スライド10



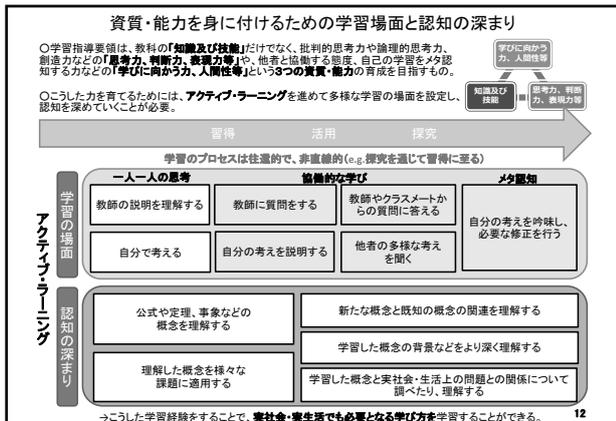
スライド11

- ### 「アクティブ・ラーニング」
- × 「アクティブ・ラーニング vs 一方向型授業」
 - × 「アクティブ・ラーニング = 対話型授業」
 - 「アクティブ・ラーニング
= 教科の深い理解につなげるための、児童生徒の状況を踏まえた柔軟な授業デザイン」

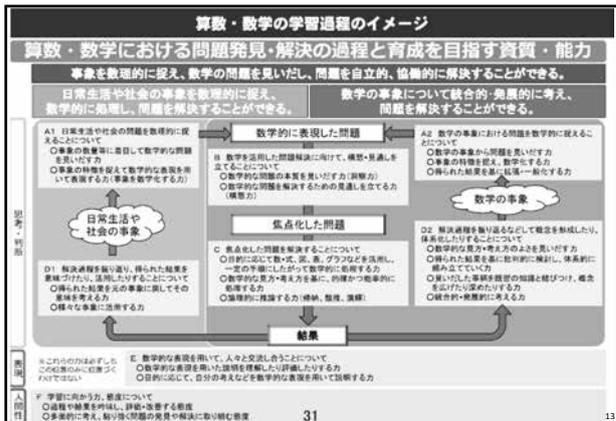
スライド12

- ### アクティブ・ラーニングの本質
- アクティブ・ラーニングを実現するためには、
 - △ 対話型・グループ型授業の導入
 - 教師が教育専門家としての専門性を磨くこと
 - 具体的には、
 - ①児童生徒理解についての専門性
 - ②教科等についての専門性
 - 「見方・考え方」

スライド 13



スライド 14



スライド 15

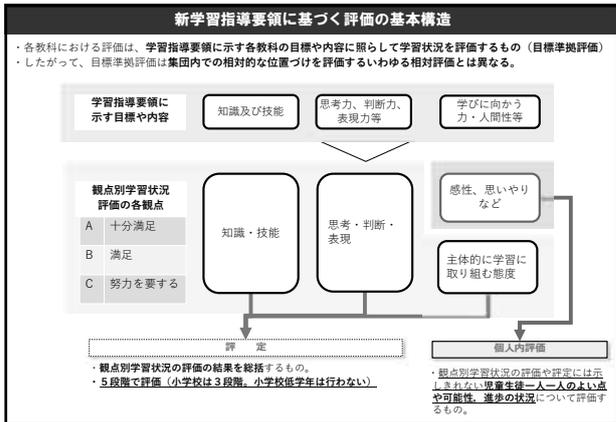
「見方・考え方」(高等学校学習指導要領地歴科解説編)

「社会的な事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付け、働かせる際の「視点や方法(考え方)」であると整理した。

すなわち、時期、年代など時系列に関わる視点、展開、変化、継続など諸事象の推移に関わる視点、類似、差異など諸事象の比較に関わる視点、背景、原因、結果、影響、関係性、相互作用など事象相互のつながりに関わる視点、現在とのつながりなどに着目して、比較したり、関連させたりして社会的な事象を捉えることとして整理したものである。

(「3 歴史総合」より抜粋)

スライド 16



スライド 17

学習評価に関する高校生等の意見

(中央教育審議会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」より抜粋)

「先生方の負担は増えると思うのですが、学校の授業内でも、テストの際だけでもいいので、どういふ点がよかった、どういふ点をもう少し頑張れば、という一言だけでも毎回頂ければ、自分を向上させるための一つのきっかけになると考えます。」(新社会人)

「通知表で数字だけ示されても分からないので、中身をもっと提示してほしいと思います。...(観点別評価ではなく)数字での評価だけでは、そう評価された理由を推測することしかできないということがあります。」(高等学校三年生)

「私の通っていた高校では授業中に寝たらマイナス1点、発言したらプラス1点といったように、学力とは直接関係のないことをポイント化して評価を付けているという現状が実際にありました。...これだと、能力がある子ではなくて、真面目に授業を聞く子、それから、積極的に発言する子というのが評価されてしまいますので、それらを意欲として評価し、それによって評定値を上下させるといふのは、評価の正当性に欠けていると思います。関心・意欲・態度という観点でポイントを付けたとしても、それは科目に対する意欲ではなくて、授業に真面目に取り組むという意欲なので、本来評価すべき点とすり替わってしまっていると、私は思っていました。」(大学一年生)

スライド 18

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

- 「関心・意欲・態度」の評価の課題
- この観点のみを取り出した評価は不適切(観点相互の関係性、「CCA」「AAC」の問題)
 - なぜ?
- ①(粘り強く取り組む側面)と②(学習を調整しようという側面)の両方を評価

スライド19

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ (案)

児童生徒の学習評価の在り方について (これまでの議論の整理について) より (抜粋)

○ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、②①の粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしている側面という二つの側面が求められる。」とされている。

○ これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。

スライド20

中央教育審議会教育課程部会児童生徒の学習評価の在り方について (報告) より (抜粋)

「これまで、評価規準や評価方法等の評価の方針等について、必ずしも教師が十分に児童生徒等に伝えていない場合があることが指摘されている。しかしながら、どのような方針によって評価を行うのかを事前に示し、共有しておくことは、評価の妥当性・信頼性を高めるとともに、児童生徒に各教科等において身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージをもたせる観点からも不可欠であるとともに児童生徒に自らの学習の専断しをもたせ自己の学習の調整を図るきっかけとなることも期待される。また、児童生徒に評価の結果をフィードバックする際にも、どのような方針によって評価したのかを改めて共有することも重要である。」

「なお、評価については、記録を集めることに終始して、学期末や学年末になるまで必要な指導や支援を行わないまま一方的に評価をするようなことがないようにしなければならない。」

「なお、例えば、地域のスポーツクラブにおける活動や各種の習い事、趣味に関する活動等、児童生徒が学校外で行う多様な活動については、必ずしも教師が把握することが求められるものではなく、在籍する学校外における評価の対象になるものではない。そのため、こうした事項については、同じ資格等であっても、学校によって指導記録や調査書への記載の有無が異なる等の指摘もある。生徒が在籍する学校から提出される調査書は、あくまでも学校における活動の記録であることに留意した上で、入学者選抜を行う高等学校や大学等は、これに過度に依存することなく、生徒一人一人の多面的・多角的な姿を考慮するよう、本人からの提出書類、申告等を通じて確認するなどの工夫が求められる。」

(中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について (報告)」)

スライド21

大学入学者選抜改革

大学入学共通テストのポイント

- ① マーク式の充実: 高等学校の授業改善へのメッセージ
- ② 記述式問題の導入
- ③ 英語の4技能評価: 英語民間資格・検定試験の導入 (→延期)

各大学の個別試験改革のポイント

学力の3要素が評価できていない入試
早期合格による高校生の学習意欲低下

→

新たな
ルールの設定

→

○ A O入試・推薦入試において、小論文、プレゼンテーション
資料、科目別共通テスト、共通テスト等のうち、いずれかの
活用を必須化。
○ 調査書の記載内容も改善。
○ 出願時期をA O入試は8月以降から9月以降に変更。
合格発表時期をA O入試は11月以降、推薦入試は12月以
降に設定 (これまでルールなし)。

スライド22

現在の仕組み

学習指導要領	学習評価	大学入試	
		センター試験	個別試験
知識・技能	評価	マーク式	各大学ごとに工夫された問題
思考力・判断力・表現力等		調査書	
学びに向かう力・人間性等	総合所見		面接・志望理由書等

Articulation between secondary education and university admission

スライド23

新しい仕組み

学習指導要領	学習評価	大学入試	
		センター試験	個別試験
知識・技能	評価	マーク式	各大学ごとに工夫された問題
思考力・判断力・表現力等		より高次の・ 認知能力	
学びに向かう力・人間性等	総合所見	E-Portfolio	面接・志望理由書等

Articulation between secondary education and university admission

スライド24

共通テストの問題作成方針

- (1) 大学入試センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、共通テストで問いたい力を明確にした問題作成
これまで問題の評価・改善を重ねてきた大学入試センター試験における良問の蓄積を受け継ぎつつ、高等学校教育を通じて大学教育の入口段階までどのような力を身に付けているかを求めるのかわり明確にしながら問題を作成。
- (2) 高校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力を問う問題作成
平成21年告示高等学校学習指導要領において育成することを旨とする資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視。問題作成のねらいとして問いたい力が、高等学校教育の指導のねらいとする力や大学教育の入口段階で共通に求められる力を踏まえたものとなるよう、出題教科・科目において問いたい思考力、判断力、表現力を明確にした上で問題を作成。
- (3) 「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定
高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等をもとに考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視。

「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法及び大学入学共通テスト問題作成の方針について」より抜粋

スライド 31

公平な試験とは何か

「一斉・一律の試験=公平」?

スライド 32

大学入試における「公平性」とは？

- 問題・日程・時間の同一性
- 一人一人の多様な側面
- 経済的格差・家庭環境
- 地理的格差

スライド 33

アダプティブなIRT

問題セットに基づくIRT

セット1	セット2	セット3	セット4	...
問1	問1	問1	問1	
問2	問2	問2	問2	
問3	問3	問3	問3	
...	

スライド 34

CBTの運用の方式 (例)

テストセンター

1. 既設機種のPC及び試験環境を利用
2. ローカル・サーバとLAN接続しながら試験実施/インターネット接続を利用して試験実施

出題システム
通常はブラウザ利用型

学校の既設PC利用

1. 高校や大学等の既設PCを利用
2. ローカル・サーバとLAN接続しながら試験実施/インターネット接続しながら試験実施
3. 試験実施の環境がテスト・センター利用の場合と大きく異なる

出題システム
通常はブラウザ利用型

タブレット端末等利用

1. タブレット端末(ノートPC)を輸送して試験実施
2. ローカル・サーバとLAN接続をしつつ試験実施/ローカル・サーバを別途設置/オフラインで試験実施
3. PC環境を別の場所でも動かす

出題システム
アプリ利用型/ブラウザ利用型

新機種のシステム開発が必要
試験実施環境についても、既設のものを利用可能。

問題作成WGと連携しながら、出題システムを開発し、検証実施をおこなう。また、出題システムの仕様を作成する。

端末を輸送して試験実施するオペレーションの検証をおこなう。また、アプリの開発をおこなうながら、DNC側でのデータ管理等をシステム化していく。

